

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 8 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	水越 楓

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
熊本サルクチュアリ、長崎大学、九十九島水族館 海きらら
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
熊本サルクチュアリ実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 17 日 ~ 平成 26 年 6 月 22 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター、長崎大学天野雅男教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

1, 熊本サルクチュアリ

実習は6/17~20日の三泊四日にて実施された。はじめの二日間は雨に見舞われ思うように観察が行えなかったこともあったが、四日間充実した実習であった。以下に概要を示す。



・アイトラッカー実験

チンパンジーのアイトラッカーの実験を見学した。その前に実際どのように視線を検出するのか各自確かめてみた。チンパンジーの結果と自分たち人間の結果を比べてみると違いがはっきりわかり、とても興味深かった。

・タッチパネル実験

タッチパネルの組み立てを行い、ボノボの施設内に設置した。今回設置した機器で実験をしたのはタッチパネルが初めての2個体だったが、ビジェイはすぐにタッチパネルを触りはじめた。母親も少し遅れて触り始め、二個体とも今後が期待できる結果となった。

・行動観察

ボノボとチンパンジーの行動観察をそれぞれ 30 分間ずつ程度行った。個体追跡・アドリブサ Figure 1 アイトラッカー実験 プリングで観察を行ったが、チンパンジーは Resting が多く、スキャンサンプリングも実施すれば良かったのではないかと考えた。

・竹の設置

チンパンジーの施設内にエンリッチメントとして導入するための竹の切り出し・設置作業を行った。

初めて熊本サルクチュアリを訪れて、チンパンジーとボノボ達と四日間過ごし、彼らの個性や知能を知ることが出来た。ボノボとチンパンジーの違いや、よく聞くアイトラッカーやタッチパネルの実験に間近で触れることが出来、とても興味深かった。チンパンジーたちを観察する時間がたくさんあり、今まで知らなかった彼らの魅力を知ることが出来、充実した実習となった。



Figure 2 竹の設置作業

2, 長崎大学・天野研究室見学

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ハクジラ類の研究を行っている長崎大学の天野雅男教授の研究室へ見学に行った。天野研究室は全員が鯨類の研究を行っている研究室のため、みな鯨類に詳しくとても刺激的であった。天野先生は多忙のため、学生さん達に色々案内をしていただくこととなった。

昔からストラディンクの解剖調査などを行っており、多くの鯨類の骨や標本等が保存されている。今回はシャチの頭骨を見せていただいた。詳細なデータは残っていないものであったが、間近で触って観察することができた。ほかにもミンククジラの胎児標本や、スナメリの骨格標本などたくさん見せていただくことができた。

現在長崎大学は北海道羅臼にてマッコウクジラの研究調査を行っている。個体識別などを行うために、船にボランティアとして乗船しているとのことだった。マッコウクジラは夏休みシーズンとかぶるため、ほとんど毎日出航していることから可能であるが、シャチシーズンも段々と観光客が増えてきたことから、調査船としてではなく観光船に同乗という形で調査が行えないか考えていきたい。また、最近の羅臼の様子や調査方法、研究内容に関して意見交換を行った。

せっかくということで陸からのスナメリ目視調査に連れて行っていただいた。大村湾の一部が一望できる山の中腹あたりの公園から双眼鏡で探したものの、あいにくの雨でなかなか探しづらくスナメリは発見できなかった。長崎や天草など周辺に多くの鯨類が現れる大学ならではの、毎月船を出したり、陸からの目視調査を頻繁に行ったりと自信の調査以外の調査にも参加することができるので、多くの経験が積めるようであった。機会があれば調査に参加させていただきたいと感じた。

3. 九十九島水族館 海きらら



現在シャチ調査でお世話になっている常盤大学の中原史夫教授が研究を行っている海きららへ見学に訪れた。ここはハンドウイルカ2頭、ハナゴンドウ1頭の計3頭のイルカを飼育している。イルカショーの際に中原先生が対象としている、ハンドウイルカ2頭でのキャッチボールを見ることができた。午前のショーでは二回挑戦して、一度目はタイミングが合わず投げることができず、二度目はきれいに上手かった。午後のショーでも一度目は失敗し、二度目は成功しこのキャッチボールを行う際にホイッスルを出すか否かという実験を行っているそうだが、ショー中ではホイッスル出しているか確認することはできなかったが、なかなかで決められていないところを見ると、お互いに息を合わせて”ボールを投げる””ボールを受け取る”という行為はイルカ達にとって難しいように思われた。

Figure 3 キャッチボ-

イルカ水槽の横には写真のようなものがあり、飼育員がずっと見てることが出来ないのにお客さんに手伝ってもらおうといった健康チェック用のブースがあった。しかし、長時間見ている訳ではない見学者にとって FUN をみる、というのは難しいらしくノートには書いていなかった。水族館で見学者側に協力してデータをとる事はやはり難しいのだと実感した。



Figure 4 見学者の協力を求めるブース

6. その他 (特記事項など)

熊本サンクチュアリのみなさま、長崎大学天野研究室の皆様にご挨拶申し上げます。